創立50周年を祝う
―芦高の思い出―

前学校長　　吉田　弘

県立芦屋高等学校創立50周年、本当におめでとうございます。つい3月末まで校長を勤めていた者として、人一倍嬉しく思います。

まず、着任式で度肝を抜かれる思いがしたことを懐かしく思い出します。私にとって最後の着任式になる筈の式でしたが、それ故に私は或ることを企らんでおりました。しかし、その企らみは全く不要に終わりました。代りにたった一言「さすが天下の芦高だ。こんな立派な式とは思ってもみなかった。私は今感動で胸がいっぱいだ。どうかいつまでもこうであってほしい」と。それ程生徒の態度は立派だったのです。この思いはその後もずっと崩されることなく、私の最後の勤務を大変さわやかな気分にしてくれました。「教職最後の2年間、すがすがしく、そしてすばらしい思い出をありがとう」の言葉が、退任の挨拶のしめくくりになりました。

今年が創立50周年ですから、私が着任した時は当然まだ50年にならないわけですが、これも驚きでした。もうとっくに50周年などは済ませた学校だと思っていたのです。50年にも満たない学校とは到底思えない程、芦屋高校は有名でした。野球が強かったこと。大学進学率が良かったこと。「芦屋」の知名度の高さ、などがそういった評価を生んでいたのではないかと思います。

在任僅か2年でしたが、結構いろいろのことがありました。伝統校ながら着任当時の芦高には余り芳しからざる評判の立っていたことも事実です。それで私は、芦高のイメージアップに意を用いることにしました。明るく開かれた学校にすること。下降線をたどっている進学率に歯止めをかけて、少しでもアップさせること。世間、特に県の教育委員会筋の誤解を正すこと、等々です。先生方の理解と協力を得て、校門前から車を他に移し、校門を開いたことが、そのとっかかりの仕事になりました。

次に取り組んだのは記念祭でした。長い伝統と輝かしい実績を誇る記念祭。正に芦高の特色を代表する看板行事と言っても過言ではありません。しかし最近の進学状況に適合せず、改革を求める声が内外に満ちてはいたのですが、どうにもできないでいたのです。８ヶ月かけてやっと時期変更の合意を取りつけることに成功しました。そして６月の梅雨期にもかかわらず、幸い、好天に恵まれ、大成功に終わったのも、今となっては大変懐しい思い出です。

その他、９月14日の集中豪雨を機に「災いを転じて福」を地で行った食堂移転問題。50周年に向けての同窓会館建設の敷地の問題で、県教委、同窓会と折衝を重ねたこと等も今思えば懐しい思い出ですし、望ましい結果に転回したのは幸運でした。

50周年記念の諸事業、諸行事が成功することと、この50周年記念を大いなる節目として、吾が愛する県芦が今後ますます発展されることを、心からお祈りしてお祝いの言葉と致します。